

令和 4 年 6 月 20 日現在

機関番号：32643

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2021

課題番号：19K19498

研究課題名(和文) 精神科看護師の自己効力感向上を図るツールの開発と評価

研究課題名(英文) Development and evaluation of tools to improve self-efficacy of psychiatric nurses

研究代表者

矢田 浩紀 (Yada, Hironori)

帝京大学・福岡医療技術学部・准教授

研究者番号：80644442

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：精神科看護師の自己効力感を測定することが可能な尺度を開発した。開発した尺度は、「精神科看護師自己効力感向上尺度」および「精神科看護師自己効力感低下尺度」から構成され、「精神科看護師自己効力感向上尺度」は「患者のポジティブな変化」、「精神科看護継続の見通し」を、「精神科看護師自己効力感低下尺度」は「精神科看護師としての自身の役割のなさ」、「過重な負担による看護力の低下」、「精神科看護の結果を見ることの困難さ」の要素をそれぞれ測定することが可能である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

精神科看護の現場に即した自己効力感を測定できる尺度は我々が知る限りなく、本尺度は海外への学術的波及効果が期待できる。

現在、職場のメンタルヘルスケア対策としてストレスチェック制度が導入されている。本研究において開発された尺度は、精神科看護の現場におけるストレスチェック制度と合わせて実施されることで、より包括的なメンタルヘルスケアへつながる可能性がある。

研究成果の概要(英文)：We have developed scales that can measure the self-efficacy of psychiatric nurses. The developed scale consists of "the Improved Self-Efficacy Scale(ISES)" and "the Decreased Self-Efficacy Scale(DSES)", and the "ISES" is possible to measure "Positive changes in the patient" and "Prospect of continuing in psychiatric nursing", the "DSES" is possible to measure "Devaluation of own role as a psychiatric nurse", "Decrease in nursing ability due to overload" and "Difficulty in seeing any results in psychiatric nursing".

研究分野：精神看護

キーワード：精神科 看護師 自己効力感 尺度 メンタルヘルス

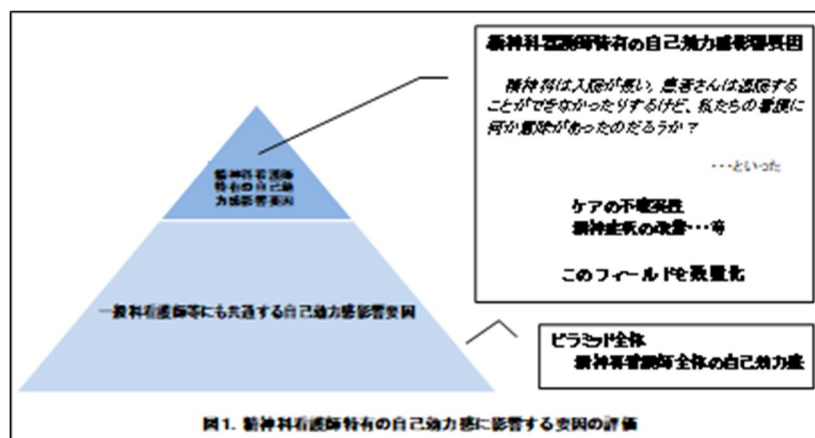
1. 研究開始当初の背景

自己効力感とは「ある結果を生み出すために必要な行動をどの程度うまく行うことができるかという個人の確信」を意味する¹⁾。自己効力感の高い人は挑戦すべき目標を設定し課題達成率を向上させるが、自己効力感の低い人は考え方が揺らぎ意気は低下する²⁾。

一般的な労働者の自己効力感には業績の影響を受けやすい³⁾。しかし、必ずしも数値として業績を求められない看護師の自己効力感への影響要因は異なり、さらに精神科に勤務する看護師の自己効力感の内容は異なる。一般病床の平均在院日数は16.2日(2016年)で、一般科看護師は身体的ケアが中心で、仕事に対する肯定的感情や自らの存在意義に対して自己効力感を有する⁴⁾。その中でも精神科病床は、平均在院日数は269.9日(2016年)で、精神科看護師は一般科と比較して看護介入の成果の得られにくさと患者の退院率の低さを感じ⁵⁾、精神科看護師の自己効力感影響要因は一般科看護師等とは異なる。現在、精神科看護師の自己効力感の多くは、一般性自己効力感尺度(以下、GSES)^{1・6)}(坂野 1986, 1989)で評価され⁷⁾、精神科看護師は一般科看護師と比べて自己効力感が有意に低い⁵⁾。自己効力感への影響により精神科看護師は患者に対して積極的関わりを諦め⁸⁾、看護の質の低下が懸念される。精神科看護師のメンタルヘルスケアに当たりまずは精神科看護師の自己効力感を測定するための尺度開発が望まれる。

現在までに、精神科看護師の自己効力感を捉える尺度として、精神科患者の人間関係に着目した尺度は存在する⁹⁾。しかし、精神科看護師の自己効力感はこれだけにとどまらない。

新尺度の開発により、一般科看護師等の職業集団にはない、図1に示すようなケアの不確実性や精神症状の改善等に関する精神科看護師特有の自己効力感影響要因¹⁰⁾(矢田 2017)を総合的に評価できるという可能性はある。そして、精神科看護師は、性別で患者からの暴力が、病棟機能別で精神疾患の種類や程度が異なり¹¹⁾(矢田 2010)、精神科看護師の自己効力感には性別・病棟機能別等で異なる可能性がある。精神科看護師の自己効力感を性別・病棟機能別等で評価することは、約85000人いる精神科看護師の自己効力感向上への有用な資料や手立てを得ることに繋がる。



2. 研究の目的

本研究は、精神科看護師特有の自己効力感を総合的に評価できる「精神科看護師自己効力感評価尺度」を開発し、性別、病棟機能別(精神科急性期治療病棟や精神療養病棟等)等に自己効力感の評価をすることまで目的とする。

3. 研究の方法

申請者は既に精神科看護師の自己効力感に影響する要因(ケアの不確実性や精神症状の改善等)を質的に明らかとした¹⁰⁾。今後は、明らかとなった項目で質問紙を作成し、「精神科看護師自己効力感評価尺度」を統計的に開発し、精神科看護師の自己効力感を特性別(性別・病棟機能別等)に明らかとする。以下の手順で研究を進めることとする。

1) 尺度の質問項目作成.

質問紙の作成: 申請者は、先行研究¹⁰⁾で明らかとした精神科看護師の自己効力感を意味ごとに分類した。その結果を踏まえて質問項目を作成する。精神科看護師の自己効力感の各項目は1mmを1点とする100mmの視覚的アナログ尺度で測定される。本尺度の妥当性を検証するため外的尺度(GSES等)を、尺度得点のカットオフ値を検討するためにPNJSS等も同時に測る。そして、基本特性を評価するために性別・病棟機能、年齢、経験年数、保有資格等の項目も設ける。質問項目の厳密性を確保するため、精神看護学と心理学の大学教員から助言を得る。

2) 尺度開発に向けた第1回・2回本調査.

調査方法：九州・中国地方の精神科医療施設の責任者に文書・口頭で調査内容を説明し、同意した施設の精神科看護師・准看護師を研究対象者とする。質問紙配布・回収は研究責任者で行うか各施設責任者に依頼する。各施設責任者に回収を依頼する場合、研究責任者へ郵送するように依頼する（第1回目調査）。なお、本尺度の再テスト信頼性を確認するために、同研究対象者に対して同内容の調査を第1回調査から約1ヶ月後に実施する（第2回目調査）。

研究対象者：本研究の解析に使用される因子分析は、観測変数（質問項目）の10倍の標本数が必要となる。我々は、49の質問項目を設ける予定であり、本研究では約500名以上の精神科看護師を目標サンプル数とした。第2回日本調査の目標サンプル数は第1回日本調査の目標である80%の約400名を目標とする。

3) 尺度の信頼性・妥当性・得点標準化と特性別評価.

解析1：各質問項目の正規性検定・弁別力算出・因子抽出を順に行い、因子の内的整合性を確認する。さらに、第1回目と2回目のデータで再テスト信頼性係数を算出する。GSES等との比較による構成概念・因子的妥当性の検証により尺度を構成する。そして、PNJSSをアウトカムとしたカットオフ値を算出し尺度が完成する。

解析2：完成した尺度得点および基本データ（年齢、経験年数、保有資格等）を特性別【性別・病棟機能別等】に比較する。特性別【性別・病棟機能別等】比較においては、基本データ（年齢、経験年数、保有資格等）の比較で5%未満の有意差があった変数を共変量として交絡因子を最小化する。

4. 研究成果

1) 精神科看護師の自己効力感尺度開発の必要性の検討

精神科看護師の自己効力感尺度開発の必要性を検討するために、精神科に勤務する看護師132名を対象に分析を行った。先行研究において確認されている精神科看護師の自己効力感を向上させる要因（24項目）と低下させる要因（25項目）におけるそれぞれの質問紙において、因子分析を用いて要因を探索し、その信頼性と妥当性を検討した。因子の妥当性には特性的自己効力感尺度を用いて相関を確認した。

精神科看護師の自己効力感を向上させる要因として3要因（第一因子「患者からのポジティブな反応」4項目、第二因子「患者との関係をポジティブに変える能力」5項目、第三因子「適切な看護の実践可能性」4項目）が自己効力感を低下させる要因として2因子（第一因子「精神科看護の不確実性」6項目、第二因子「看護師としての役割喪失」6項目）がそれぞれ確認できた。これら因子のクロンバック α 係数は0.7以上の内的整合性が確認できた。各因子の妥当性について、特性的自己効力感との間に、「精神科看護の不確実性」以外の因子で弱から中程度の有意な相関が確認できた。

これらの結果から、精神科看護師の自己効力感に影響する要因は一般的な自己効力感とは異なり、精神科看護師のメンタルヘルスケアを具体的に立案していくために、精神科看護師の自己効力感をとらえることができる尺度開発の必要性が示唆された。

2) 精神科看護師自己効力感評価表の開発

「精神科看護師自己効力感評価票」の開発に向けて、精神科看護師約700名からの調査回答に基づき分析を行った。そのうち、514名を解析対象とした。「精神科看護師自己効力感評価票」は「精神科看護師自己効力感向上尺度」と「精神科看護師自己効力感低下尺度」で構成されており、それぞれの尺度において統計的に解析された。その結果、「精神科看護師自己効力感向上尺度」は2因子11項目（第1因子：患者のポジティブな変化6項目、第2因子：精神科看護継続の見通し5項目）から構成された。さらに、「精神科看護師自己効力感低下尺度」は3因子12項目（第1因子：精神科看護師としての自身の役割のなさ3項目、第2因子：過重な負担による看護力の低下4項目、第3因子：精神科看護の結果を見ることの困難さ4項目）から構成された。それぞれの尺度および下位尺度ごとの信頼性として、クロンバックの α 係数は全てにおいて0.6以上と許容できる数値を示した。それぞれの尺度および下位尺度の収束的妥当性として、一般性自己効力感との相関係数は弱から中程度の有意な相関を示した。予測的妥当性として、職業性ストレス簡易調査票のストレス反応尺度との相関係数も弱から中程度の有意な相関を示し、就業継続意思を示す項目との相関係数も一つの下位尺度を除き弱い有意な相関を示した。尺度の因子的妥当性として、モデルの適合度は許容できる数値を示した。よって、本尺度の信頼性と妥当性は概ね担保された。

<引用文献>

1. 坂野 雄二, 東條 光彦 (1986): 一般性セルフ・エフィカシー尺度作成の試み. 行動療法研究, 12(1).
2. Bandura Albert (1997). Self-Efficacy: the exercise of control. New York, NY: W. H. Freeman and Company.

3. Timothy A Judge, Christine L Jackson, John C Shaw, Brent A Scott, Bruce L Rich (2007). Self-efficacy and work-related performance: the integral role of individual differences. *Journal of Applied Psychology*, 92(1), 107-127.
4. 撫養真紀子, 勝山貴美子, 青山ヒフミ (2014). 病院に勤務する看護師の職務満足測定尺度の信頼性・妥当性の検討. *社会医学研究*, 31(1), 37-44.
5. 谷幸晃, 瀬戸栄之, 竹内重之 (2012): 精神科看護師の一般性セルフ・エフィカシーの実態調査. *日本精神科看護学術集会誌* 55(1), 394 - 395.
6. 坂野雄二 (1989). 一般性セルフ・エフィカシー尺度の妥当性の検討. *早稲田大学人間科学研究*, 2, 91 -98.
7. 伊山聡子, 前田ひとみ (2015): 多職種の自己効力感に関する文献検討. *熊本大学医学部保健学科紀要* 11, 13 - 23.
8. 木村克典, 松村人志 (2010): 精神科入院病棟に勤務する看護師の諸葛藤が示唆する精神科看護の問題点. *日本看護研究学会雑誌* 33(2), 49 - 59.
9. 坂東紀代美, 西田実紗子, 高間静子 (2015): 精神科看護師の患者との人間関係における自己効力感測定尺度の開発. *日本看護医療学会雑誌* 17(2), 22 - 33.
10. 矢田浩紀, 小林真子, 大達亮, 山根俊恵 (2017). 精神科看護師の自己効力感に関連する要因. *産業医科大学雑誌* 39(3) 229-234.
11. 矢田浩紀, 大森久光, 船越弥生, 加藤貴彦 (2010). 精神科看護師の職業性ストレスに関する現状の問題点と今後の展望. *産業医科大学雑誌* 32(3) 265-272.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Yada Hironori, Abe Hiroshi, Odachi Ryo, Adachi Keiichiro	4. 巻 15
2. 論文標題 Exploration of the factors related to self-efficacy among psychiatric nurses	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 PLOS ONE	6. 最初と最後の頁 e0230740
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1371/journal.pone.0230740	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Yada Hironori, Odachi Ryo, Adachi Keiichiro, Abe Hiroshi, Yonemoto Fukiyo, Fujiki Toshiya, Fujii Mika, Katoh Takahiko	4. 巻 12
2. 論文標題 Validity and reliability of Psychiatric Nurse Self-Efficacy Scales: cross-sectional study	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 BMJ Open	6. 最初と最後の頁 e055922
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1136/bmjopen-2021-055922	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------